

# 青丘文庫研究会 月報

No.275

2014年10月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内  
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp  
 ①在日朝鮮人運動史研究会関西支部 (代表・飛田雄一)  
 ②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)  
 郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料3000円  
 ※他に、青丘文庫に寄付する図書を購入費として2000円/年をお願いします。

## <巻頭エッセイ>

### 文芸雑誌「信太山」(信太山詩の会)との出会い 三宅美千子



文芸雑誌『信太山』(創刊号・1955年4月)表紙の「信太山は日本の国にあるけれど 私達朝鮮人は日本人以上に 信太山に深い愛着を抱いている 信太山には私達朝鮮人の 数限りない多くの思い出がある 母の魂が 幼い妹の魂が 安らかに眠っている 私達朝鮮人の若き日の思い出が 信太山の空間に含まれている 信太山は日本人朝鮮人を差別せず固く強く一つに結びつけている 信太山は私達の 第二の心の故郷だ」とは朴順慶さんの言葉である。

2006年12月、青丘文庫研究会で宇野田尚哉さんが報告した時、資料『ジンドレ』受贈民族詩誌等に『信太山』(1、2号)の名前を見つけてから気になっていた。

2011年3月11日の東日本大震災の起った頃、私は和泉市の知人と泉北朝鮮小学校の教員だった朴順慶さんを初めて訪ね、解放後の民族学校建設の話の中で聴き入っていた。

大阪府和泉市八坂町(現在の幸町)にあった泉北朝鮮小学校(1946年1月創立)は閉鎖令が出ても死守し続けた府内2校の1つである。当時の生徒、教員、青年団から聞き取りをしたいと思っての訪問であった。

朴順慶さんは1928年慶尚北道達成郡甘三里に生まれ、1歳で父母と日本に来て当時の南王子村(後に八坂町・現在は幸町)に住むことになった。彼や妹たちが南王子尋常小学校(妹は後の八坂国民学校)で厳しい差別を受けた体験は今でも昨日のように繰り返し話される。1945年4月、妹(良子)は体調が悪いのに先生が怖いからと登校し、音楽の授業で歌わないと酷く殴られ、病状が悪化してその翌日「先生が憎い」とアリランを唄いながら息を引き取ったとのこと。40年以上も前の朝日新聞に載った歌「せんせいと言う名の歌をきくたびに差別に泣きし亡き妹想う」(朝日歌壇)。茶色くなった新聞が今も手元に置かれている。

彼も小児麻痺を患い、教師から不自由な体に体罰を受けた足の傷跡は今も生々しい。

話の途中で「私がこの村で発行した文学サークルの雑誌です」と茶色くなった文芸雑誌『信太山』(1・2号)を挿入れから出してこられた。探していた雑誌だ。「1955年4月に1号、6月に第2号を出して生野に転勤になり終わりました。朝鮮学校の生徒、教員、地元の日本人の先生もサークルに参加していました。金時鐘さんに贈呈しましたよ」と聞いて宿題の答が見つかった気分だった。

彼は、厳しい差別を受けた体験から差別を払拭するには日朝友好しかないと日朝協会の活動に精を出す。朝鮮語や

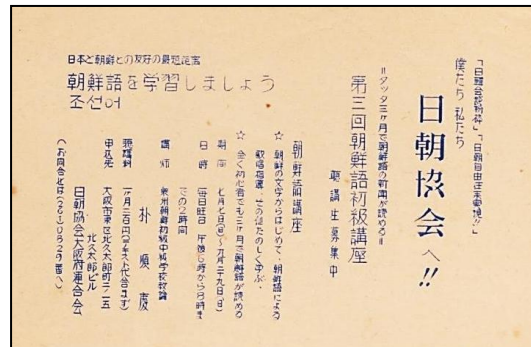
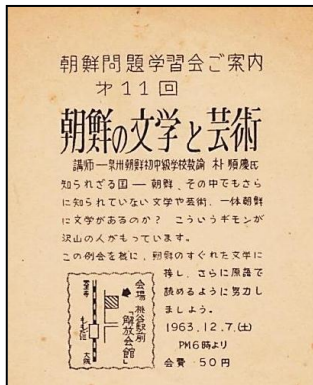
歴史・文化を教えたが熱く語ったことであろう。

日朝協会の代表川村市兵衛氏は西今里中学校の校長も勤めたが、「和泉市の人で信太山の聖神社近くの人でした」と聞いたのは初めてだった。

戦前から人造真珠産業は和泉市の在日朝鮮人の生活を支えてきたが「玉まきの火」はそうした背景を表している作品である。文化運動と言うより差別を払拭するためにと信太山詩の会に全力を注いだ。「詩を書こう」と呼びかける日朝友好推進の信念は固かった。

戦後の華僑新聞「国際新聞」についても「在日朝鮮人では私が初めて投稿しました。自由詩、コント、短歌、教育問題などです」との話も興味深かった。

また、大阪日朝学院で朝鮮語を教えたが、朝鮮語講座受講生の文章を大阪外大朝鮮語科有志が雑誌『むくげ



(早稲田)』として出版した。その3号(1968年7月)～6号(1972年10月)に「信太山物語」を4回連載している。朝鮮人差別を受けて亡くなった妹のことを書いているが感情が激してなぐり書きしたと言う。東京から映画化したいとの話があったそうだ。

2012年8月に和泉市域の教師が集まって彼の差別体験を聞き、母校の幸小学校でも管理職や職員に話す機会が持てた。積み積もった気持がはれたそうだ。彼を送迎し同行した私も人生のいい日であった。

## 第294回朝鮮近代史研究会 (2014年7月13日)

### 「日本統治下の朝鮮・台湾の国策紙芝居」のあれこれ 鈴木常勝



私は日本の風土に合ったものとして、できるだけ着物を着るようにしている。と言うよりも、「着物は本当に日本の風土に合っているのか?」「なぜ着物は近代日本の生活から淘汰されてしまったのか?」という疑問を、酷暑の時も厳寒の時も、雨の日も風の日も自ら着物を着ることにより人体実験として、現代日本人の好奇の目にさらされつつも敢えて着ることにより社会実験として続けて、数年。なるほど、着物は活動的でない。腕の活発な動きを制限する広幅のくたもと>、走れば乱れる<すそ>、雨に弱い<ぞうり>。淘汰されるは、当然だと納得する。しかし、それらの欠点が、ゆったりした動きで暮らす、風に吹かれて自然と一体となる、腹で着こなす丹田どっしり、という長所に通じる。

最近、男性用羽織(短い上衣)を収集していて、その裏地に「朝鮮港風景」「朝鮮農村美人」の絵のある二着を見つけた(写真参照)。羽織裏の絵の多くは、狩野派、水墨画、浮世絵、歴史故事であり、戦時期には日中戦争画、日本軍占領地地図などもある。羽織裏には日本美術史や歴史が表れている。その中に「朝鮮」の登場だ。「朝鮮港風景」は「ハレの日」に着る黒紋付の裏地の絵。黒紋付に染めた家紋は「三つ柏」。家紋事典でしらべると、その家紋を使った家系には、多摩の高麗氏や筑前の宗像氏がいる。「さても、おもしろや! 誰が着たのか?」と、着物と歴史探求が結びついた。

6月から7月にかけて、兵庫県立美術館で「官展に見る近代美術」と題して、日本統治下の朝鮮、台湾の官展（官設の公募展）入選作品が展示された。官展に入選することが画家の出世コースとされた時代。手本は日本人画家の作品、審査員は日本人画家という条件の下で、朝鮮人、台湾人は己の才能を發揮しようとした。彼らが描いた、万人受けのする「上品な作風」の絵から、何を読み取るかの研究は始まったばかりだと、解説文は説明している。今回、青丘文庫研究会で報告した国策紙芝居についても、「皇民化」政策、軍人育成、国語（日本語）強要の宣伝を意図した日本人側の動きは、ある程度明らかにできた。しかし、「現地の観衆は国策紙芝居をどう見たのか」の分析はできていない。紙芝居説明のセリフで「日本の天皇から授かった命を戦争で捨てるのだ」と言われて、朝鮮人、台湾人側は納得できるものなのだろうか。

おもしろい話がある。戦中の台湾でも映画上映に際しては、台湾語の活動弁士（映画説明者）がいたそうだ。観衆は字の読めない人も多く、しかも台湾語は漢字表記できない言葉もある。監視役の日本人役人がいても、台湾語に詳しくない。それで映画説明以上のことをしゃべっていたという（三澤真美恵『「帝国」と「祖国」の間 植民地期台湾映画人の交渉と越境』岩波書店 2010年）。私が今回報告した、朝鮮語版二篇、台湾語版二篇の紙芝居は、絵の裏に国語（日本語）と現地語の台本を併記したものだ。国策紙芝居の実演現場でも同様のことが「大衆にわかりやすく」との建前で行われていたことを台湾人・張棟区は記す（日本教育紙芝居協会『紙芝居』1943年3月号）。何を付け加えてしゃべったのかは、想像するしかないが、大衆はお上の指示に素直ではないのだということは、わかる。

私は十年来、国策紙芝居を戦争認識の教材として大学のアジア現代史授業に使っている。使うのは日本人向けの国策紙芝居だ（その教育実践を『戦争の時代ですよ 若者たちと見る国策紙芝居の世界』大修館書店 2009年 に書いた）。だが、台湾に台湾語を併記した国策紙芝居が残っているとは、予想もしなかった。戦後の蒋介石独裁政権、1988年まで続いた戒厳令体制下の台湾で「日本軍国主義」の資料を所持することは、「犯罪者」にでっち上げられる恐れが大いにあった。2013年に至って私は初めて、台湾現地で収集家の郭さんが所蔵する国策紙芝居に出会った。台湾で近現代の歴史資料を収集している郭さんは、街の食堂で私に台湾名物の小皿料理とラーメンをごちそうしてくださった。彼は小皿料理をつまみながら、私にこう話しかけた。「台湾人は物忘れが早い。だから足元が安定していない。歴史を知ることは、自分の足元を見つめることなのだよ」彼は官立の博物館などに、自分が所蔵している歴史資料を貸出している。官よりも大きい民なのだ。

アジアの「民間交流」は、かくもおもしろい。例えば、「北朝鮮、勝手に入国体験記—鴨緑江越境」も、中国の観光ガイドの「民間ルート紹介」で実現したのだ（「青丘文庫研究会月報」256号 2013年1月に掲載）。私は今、「着物に活かされた日本絵画」を台湾人に向けて展示、紹介すべく、民間のネットワークを結び付けて準備中だ。「着物と日本絵画のおもしろさは世界に通用する」との確信を持って。（2014・7・28記）



1 郭さんと筆者 2 羽織裏の「朝鮮港風景」 3 羽織裏の「朝鮮農村美人図」 4 台湾人向け国策紙芝居『曙の母』の一場面。枠には「台北州保険組合連合会」と記す。



## <ご案内>

### ●神戸電鉄敷設工事朝鮮人犠牲者を追悼する集い

日時：2014年10月26日(日) 午後0時/会場：神戸電鉄朝鮮人労働者モニュメント前

追悼集会終了後、タクシーに分乗して、事故現場のひとつ烏原(からすはら)貯水池公園でキムチチゲの会です。参加費は、一般3,000円、ノンアルコール2,000円、学生1,000円。キムチチゲの会は、要申し込み。hida@ksyc.jpまで。

●朝鮮史セミナー『北方部隊の朝鮮人兵士～日本軍に動員された植民地の若者たち』(同名の本は、現代企画室、2014.3、3024円)  
講師：北原道子さん(歴史研究者、在日朝鮮人運動史研究会会員)/日時：2014年11月14日(金)18:30/会場：神戸学生青年センター

●軍隊「慰安婦」問題に関する講演会、11月18日(火)18:30、講師は藤永壮さん、会場：学生センター

●『BC級バタビア裁判・スマラン事件資料集』編集・発行：強制動員真相究明ネットワーク 2014年8月、1000円(送料82円)、A4、135頁。※購入希望者は、郵便振替<00930-9-297182 真相究明ネット>に送料とも1082円をご送金ください。入金確認後、折り返しお送りします。多多数の割引はありません。

●空襲・戦災を記録する会全国連絡会、第44回神戸大会—創る、伝える—<資料集>

2014年8月23日発行/編集・発行：神戸大会実行委員会、神戸学生青年センター内/A4、104頁、800円(送料82円)※購入希望者は、郵便振替<00910-3-165629 空襲神戸大会2014>で送料とも882円をご送金ください。

## ●青丘文庫研究会のご案内●

■第353回在日朝鮮人運動史研究会関西支部会 2014年10月12日(日)

<その1>午後1時～3時

「WANTED! かつての外国籍公務員・教育公務員!—戦後の公立朝鮮人学校・分校

及び民族学級の朝鮮人教員における「教諭、任用」 藤川正夫(兵庫在日朝鮮人教育を考える会)

<その2>午後3時～5時

「在日朝鮮人子女の教育史再考—朝鮮総連系学校を中心に」 梁永厚

※会場 青丘文庫(神戸市立中央図書館内、TEL 078-371-3351)

※月報9月号はメールニュースとしました。以下、研究会の記録です。

■第352回在日朝鮮人運動史研究会関西支部会/2014年9月14日(日)午後1～3時

「1970~80年代のウトロ地区をとりまく地域運動の芽生え」 全ウンフィ

■第295回朝鮮近現代史研究会/2014年9月14日(日)午後3～5時

「韓国の国家形成・経済開発と生活政策」 金早雪

【今後の研究会の予定】来月以降の予定。11月、在日(関智焄)、近現代史(未定)。12月、在日(黒川伊織)、近現代史(未定)。研究会は毎月第2日曜日です。報告希望者は、飛田または水野まで。

【月報の巻頭エッセイの予定】11月号以降は、佐野通夫、吉川絢子、安致源、伊地知紀子、太田修、高正子、坂本悠一、全淑美、足立龍枝、渡辺さえ、池貞姫、張允植、横山篤夫、松田利彦、西村寿美子、玄善允、川口祥子。よろしくお願ひします。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】■2014年度の青丘文庫研究会会員証を本月報に同封しています。会員は、①月報購読料3000円をお支払ください。<00970-0-68837 青丘文庫月報> 但し、学生会員で印刷した月報を不要な方は3000円の入金なしに会員証を発行します。その他、青丘文庫に寄付する図書購入費として2000円/年をお願いしています。在日会員は年会費5000円で、雑誌3冊を入手することができます。■火山の爆発、大型台風、異常なことがおこっています。できる範囲で備えましょう。飛田 hida@ksyc.jp